

## 利用者が東日本大震災・熊本地震の被災者支援に取り組んで

＝「被災地の子どもたちに木のおもちゃを贈ろう！」＝

○武藤 康司<sup>1</sup>、石川 英五郎<sup>1</sup>、平松 謙一<sup>2</sup>

<sup>1</sup>社会福祉法人 おあしす福祉会 ピアワーク・オアシス、<sup>2</sup>社会福祉法人 おあしす福祉会

### 1、はじめに

社会福祉法人おあしす福祉会（以下「おあしす」）は、江東区内で4ヶ所の通所施設（就労継続B型2ヶ所、多機能型〈就労移行と就労継続B〉1ヶ所、地域活動支援センター1ヶ所）と2ヶ所のグループホームを運営している。江東区内の通所施設利用者は200名を超え、利用者の多くは統合失調症圏の診断を受けている。就労支援事業は給食、清掃、リサイクルショップ運営、木のおもちゃの製造販売、下請作業などである。

### 2、おあしすの被災地へ向けた支援活動

2011年に発生した東日本大震災は、利用者に大きな衝撃を与えた。発生直後は被災地の惨状を目にして、不安と無力感が利用者を支配したが、利用者の中から「被災された方々のために何かできないか」と声があり、様々な支援が始まった。「被災地の子ども達に木のおもちゃを贈る活動」はそのひとつである。

本活動の当初の取り組みは2011年の本学会で既に発表した通りである。

### 3、「被災地への木工寄贈」活動の概要

活動開始から7年間、利用者は木のおもちゃの寄贈を通じて被災地の方々との交流を深めてきた。利用者と被災地の方々はお互いの地を訪問し、連絡をとりながら扱っている製品をそれぞれの地域で販売するなどの交流が続いている。

活動はそれぞれの地域の市民や企業の協賛を得ながら発展した。2016年10月からは利用者の声を受け、熊本地震（2016年4月発生）の被災地も対象とし、既に400を超えるおもちゃを現地に届けている。

また、2017年から江東区で生活している東日本大震災からの避難者との交流も始めた。当初は避難者への支援を想定した交流だったが、「もう支援を受けるだけでなく、誰かの役に立ちたい」という避難者の言葉を受けて、おあしす利用者と一緒におもちゃを作り熊本の子どもたちに贈る、という支援者としての役割をともに担うことになった。

倫理的配慮として、利用者、被災者、地域市民・企業には活動の趣旨、目的、方法について口頭で説明、また活動によって得た情報はおあしすで厳重に保管し、本活動以外の目的で使用しないことを口頭および書面で説明し、回答をもって同意を得たこととした。本発表についても同様にして同意を得た。

### 4、結果と考察：この活動の意義

この活動を通じて、利用者は震災で困っている人たちに対して「何もできない」存在から被災者と結びつくことで「誰かの力になれた」という手ごたえを得られたと考える。この経験により自身が存在する意味を確認できたことは、利用者一人ひとりの回復に大きく寄与するものと考えられる。

また、7年間の活動は被災者と利用者との関係性に大きな変化をもたらした。今では地域の市民や企業も参加し、協同して他の被災地域の支援活動にあたるなど、一方向ではない連携がなされている。

社会の中で「弱者」とされがちな障害当事者や被災者が支え合いながら、自身がかけがえのない存在として、それぞれの住む社会で役割を持って生きる力をつけていく姿は共生社会のひとつの在り方であると考えられる。